お釈迦様の入滅

令和三年二月法話

まほろば塾 塾長
薬師寺管主　加藤朝胤

佛舎利（ぶっしゃり）入滅したお釈迦様が荼毘に付された際の遺骨及び棺、荼毘祭壇の灰塵を指す。

「舎利」は遺骨または遺体を意味するⓈシャリーラ(śarīra)の音写（śarīra शरीर の本義は単に「肉体」の意で、死体も指す）設利羅　実利　室利　身骨

八分舎利

お釈迦様入滅の地クシナガラの統治部族マッラ族は当初佛舎利の専有を表明し、佛教を国教とする周辺国との間に佛舎利を巡って争いが発生する事態となった。ドローナの采配により八等分され、それに、容器と残った灰を加えて周辺内外の十ヶ所に奉安された。

約二百年の後、敬虔な佛教徒であったマウリヤ朝のアショカ王はインド統一を果たした後、全国八ヶ所に奉安されていた佛舎利を発掘し、周辺国も含めて八万四千に遺骨を分け佛塔を建立した。

中国での佛教伝来

求法僧が佛舎利の奉納されたインドやタイに赴き、佛舎利の収められたストゥーパ（佛舎利を納骨する円すい形の佛塔。卒塔婆）の前で供養した宝石類を「佛舎利の代替品」として持ち帰り、それを佛塔に納めた。この宝石を佛舎利の代用として奉納する手法は古くから日本でも行われてきた。

日本での佛教伝来

五三八年（『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』説）または五五二年（『日本書紀』説）に伝えられたときは、佛像や経典、幡蓋を伝えたと記すが、舎利についての記述はない。

『日本書紀』には、推古元年正月十五日（五九三）に「佛の舎利を以て、法興寺の刹の柱の礎の中に置く」とある。

昭和三十一年、飛鳥寺周辺の発掘調査により、法興寺（または元興寺）の遺構が現れた。そして今は失われた佛塔の芯礎から、木箱に収められた舎利容器が発見された。舎利は推古元年に芯礎に安置されたが、完成した佛塔は建久七年（一一九六）に落雷のため焼失した。舎利は翌年いったん掘り出され、新しい舎利容器と木箱に入れて、ふたたび芯礎部分に埋めたものという。

『日本書紀』には、推古三十年七月（六二三）新羅の真平王が佛像・金塔・舎利などを贈ってきたとある。この舎利は四天王寺に収められたとされている。

初期佛教では佛法（教え）を貴び、またインドの慣習儀礼に基づき佛像を造ることがなかったので、宝樹・菩提樹・宝座・佛足・転法輪等が礼拝対象となる。

更に佛舎利塔が唯一具体的な形を持った信仰対象となっていた。しかし日本へ伝来したときは最初から佛像があったので、佛舎利とそれを祀る佛塔は必ずしも信仰の中心となったわけではない。

天平勝宝六年（七五四）鑑真が戒律とともに佛舎利を将来。

大同元年（八〇六）十月に空海が真言密教とともに佛舎利を将来。

日本において佛舎利信仰は、佛塔だけでなく舎利容器に収めた佛舎利塔を室内でも礼拝するようになる。

佛舎利の代替品

佛舎利とは本来、釈迦の遺骨・遺灰・毛髪等であり、このような佛舎利を「真舎利」「真身舎利」という。しかし真舎利は入手が困難であり、数も限られてくるので、各国で佛舎利の代替品を塔に納めるようになる。

遺骨によく似た宝石や貴石等を代替品とした。

骨舎利　白　髪舎利　黒　肉舎利　赤

浄書した経典を佛舎利とみなして塔に納めた。このような例を「法舎利」「法身舎利」という。法隆寺の百万塔陀羅尼も法舎利信仰の一つである。

覺王山日泰寺の縁起

一八九八年にインド・ルンビニ近郊のピプラワーでイギリスの駐在官ペッペがストーパーを発掘、その際に発見した壺に刻まれていた紀元以前の文字を解読したところ、釈迦およびその一族の遺骨であると書かれていた。ペッペは英国王室にこの佛舎利を献上、しかしシャム国と日本からの意向により英国からシャム国（現在のタイ王国）に譲渡された。その一部はシャム国王ラーマ五世から日本国民へ贈られ、それを納めるために創建されたのが覺王山日暹寺（現在の覺王山日泰寺）である。

明治三十一年（一八九八）お釈迦様（ゴータマ・シッダルータ）の遺骨真舎利が発見される。インドにおいて、イギリス人ウイリアム・C・ペッペによって水晶製の舎利容器が発掘され、古代文字の解読の結果、お釈迦様の遺骨であることが判明。

明治三十二年（一八九九）真舎利が、英国からシャム国（現在のタイ王国）へ譲渡される。

明治三十三年（一九〇〇）真舎利がシャム国ラーマ五世から日本国民へ贈られる。

明治三十七年（一九〇四）真舎利と黄金の釈迦像を奉安するため、覺王山日暹寺として創建。

大正三年　（一九一四）超宗派として伽藍を整備。

昭和二十四年（一九四九）シャム国のタイ王国への改名に合わせて日泰寺に改名する。